地域コミュニティハウスをつくり マキノ町の一次産業を 元気づけよう！

特定非営利活動法人 グローバルヒューマン［滋賀県高島市マキノ町］

設立年月　1992年4月
（2004年10月NPO法人化）
メンバー数　194名
代表者名　高橋 英夫
〒520-1811
滋賀県高島市マキノ町海津2323
特活）グローバルヒューマン　統括本部
連絡先　高橋 英夫
TEL 0740-28-8051
FAX 0740-28-8052
hecjpan@mbox.kyoto-inet.or.jp
http://www.g-human.com

わたしたちについて
日本固有の伝統技術・技能を研鑽・承継するため、地域住民と協働システムを構築すると共に、社会的弱者と呼ばれる人達の自立生活・社会復帰支援活動として「日本の原風景と生態系の回復・再生・保護・保全」事業を展開する。

テーマ｜農山漁村活性化のコミュニティハウス創設と居住支援

地域の概要｜高島市は琵琶湖の西に位置し、2005年にマキノ町他4町1村が合併してできたまち。人口は約5万4千人。マキノ町は高島市の最も北に位置しており、日本に二つしかないカタカナの町である。

マキノ町は、日本のさくらの名所百選のひとつであり、琵琶湖八景のひとつでもある。また、古くから、街道・湖上交通の要所として栄え、水路と陸路の結節点、琵琶湖の「津」として発達した湖北の都市的要素、集住・商業の場としての特徴を現在に留めるとともに、琵琶湖の原風景である湖岸の水辺風景を背景に、農・山・漁村の3つの特徴を併せ持っている。

然しながら、中山間地域での過疎高齢化が急速に進み、消滅の恐れのある集落も存在する。さらに、耕作放棄地となってしまった田畑も多く、その多くが原野化し、既に農地としての回復が困難となっているところもある。

活動の概要｜ホームレス、ニート、ネットカフェ難民等と呼ばれる人々のために、民家3棟を改修し、地域のコミュニティハウスを作った。それらを「居住スペースと地域のお台所」、「再チャレンジ・夢工房隊」の作業活動拠点、様々な人が集える「おしゃべりサロン」として活用を開始した。さらに、元ホームレスの自立等と村落の活性化のために、休耕田を活用したホンモロコの養殖事業を推進した。

活動に至った理由や背景

1. 2007年1月、国・自治体調査によるホームレス数は、男性1万68百人、女性6百人、性別不明（？）11百人、合計1万85百人だと言うが、これ迄の当NPO法人の活動実績からしても、また、最近ようやく注目され社会問題化しているニートやネットカフェ難民と呼ばれる人々を含め、同数字は氷山の一角で、悲惨な現状が継続している。

また、生活保護費受給者は全国で184万人を超え、年率14%強で増え続けている。地方は疲弊し、過疎化・少子化、高齢化の一途を辿り、若者の多くが都会に流失した。他方、都会では、家庭・職場・地域社会から弾き出された多数の人達が寒空の下に溢れ出ている。自殺者は12年連続3万人を越え、日本が直面するこれら現実に歯止めを掛けることが国民的課題として急務となっている。

2. 全国の地方は高齢化・少子化・貧困化・人口減少が日々進行し、村落が疲弊・崩壊している。既に38万haが耕作放棄地となって全国に拡大・荒廃化し、さらに全体の48%の耕作放棄地が稲田としての復元が困難になっている。

当NPO法人が活動対象とする滋賀県高島市も、中山間地域過疎高齢化が急進行し、65歳以上が過半を占める限界集落が10箇所、55歳以上が過半を占める準限界集落が33箇所あり、県下で最も存続が危ぶまれる町となっていることに加え、滋賀県下農家数31,300戸の80%以上が2ha以下の零細小規模兼業農家で、全体の30%に当る9,100戸が「何も作らなかった、何も作れなかった」状況がほぼ毎年継続している

3. 当NPO法人は、滋賀県・京都府・岡山県の計5箇所で第2種社会福祉事業「無料定額宿泊所」を運営し、各行政の短期受け入れ要請に従ってホームレス・ニート・ネットカフェ難民・派遣切り・同予備軍と呼ばれる人たちを年間延数百人規模で受け入れ、就労支援活動を行っている。また、医療機関・弁護士・行政などと協働し、疾病治療、債務整理、家族・親族関係修復、生活保護手続、社会復帰・自立支援講習会、技能訓練、就労相談等の活動も行って来た。

しかしながら、彼らが熱心に求職活動を行うも、「連帯保証人がいない、多重債務者である、学歴が低い、住居が定まらない、配偶者がいない、・・」など様々な事由を付けられ、長年に亘り就労できない重い現実がある。

活動内容

地域コミュニティハウスの創設

元ホームレスらが民家３棟を改修し、「民家修繕、除雪作業手伝い、耕作放棄地の耕作手伝い、ホンモロコ・マゴイの養殖・放流作業、長期間放置された人工植林地の間伐・切出し作業」等々、ホームレス・ニート・ネットカフェ難民・同予備軍が、ありとあらゆるコミュニティサービスの提供活動を本格稼動する拠点づくりを行った。また、この拠点を活用して、高齢者・障害者を含む社会的弱者の自立生活・社会復帰のための居住支援を同時並行的に行うこととした。

３棟各棟の内容・役割・活動は、以下の通り

1 棟目

元ホームレス・同予備軍と呼ばれた人達のうち、勤労意欲の極めて高い人達が移住する「居住スペースと地域のお台所」。

彼らの前職は、「瓦職人、左官工、水道工、大工、とび職、溶接工、長距離運転手、リフト運転手」と様々であるが、押しなべて高い技能を持ちながら、不合理な理由によって働く機会から長年排除されたプロ集団である。

2 棟目

「再チャレンジ・夢工房隊」と称する彼らの作業活動拠点棟。

(1) 当 NPO 法人が耕作放棄地を有効利用した養殖田で育養する環境省レッドデーターブック最高ランク「絶滅危惧種 1 A 類」指定の琵琶湖固有種ホンモロコや、マゴイの孵化・採卵・甘露煮炊き・パック詰め作業

(2) 長年放置された植林放棄山地から彼らが切り出した間伐材を再生可能な森林バイオマス・薪・炭材としての生産作業。

(3) 休耕田・耕作放棄地を利用した耕作代行・蔬菜類生産物の仕分け・パック詰め作業。

(4) 琵琶湖では希少な存在、或いは絶滅した「花ハス、カキツバタ、黄菖蒲、アヤメ、ガマ、ジュンサイ」などの抽水植物・水生植物の切り花や鉢植え仕分け、同生産物のハス茶、ジュンサイの実、ハチミツの加工・パック詰め作業。

(5) 地域の高齢者宅などに対する「家屋修理、庭木剪定、雪下ろし、買物・病院への送迎支援、家事補助作業」の安価サービス提供基地として活用する。

3 棟目

地域の高齢者・子供・身体障害者などの社会的弱者、他地域からの来訪者や観光客が、何時でも誰でも集える「おしゃべりサロン」。

彼らが生産した薪、蔬菜類の農産物、花ハス・ガマ等の抽水植物の切り花や鉢植え、ハス茶・ジュンサイの実・ハチミツ、ホンモロコ・マゴイ活魚や甘露煮炊きに加え、周辺農家が持ち寄る米等の農産物・特産物・地方民芸品の販売所、更に観光シーズンには土産物販売所、観光ボランティアガイド待機所、観光客無料休憩小荷物預り所、有料観光自転車貸出し所として多目的利用する。

コミュニティハウスの改修作業

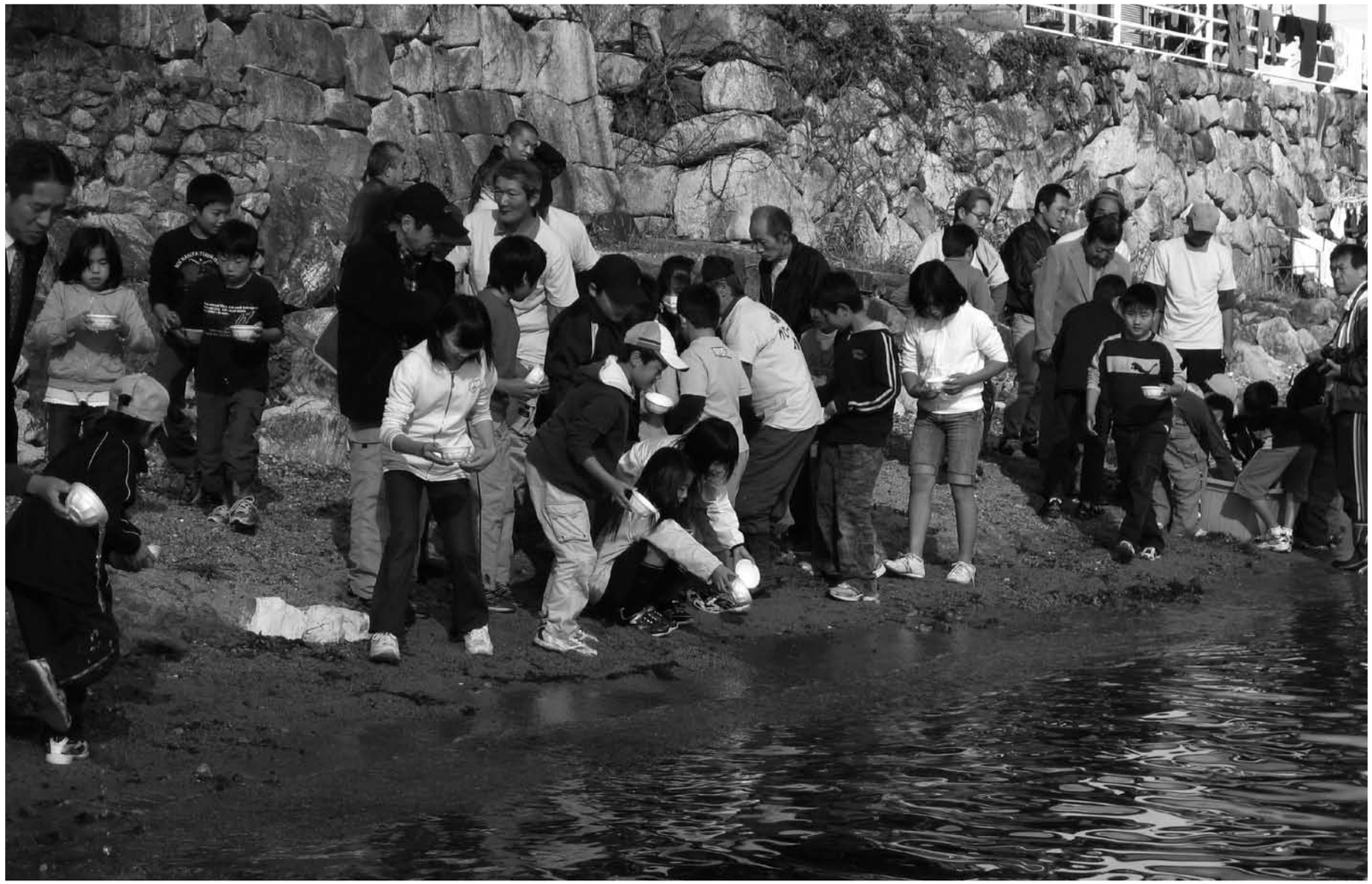
本事業で自慢できることがあるとすれば、コミュニティハウス改修工事を、「単なる怠け者、社会のお荷物」と非難された人達が、自らの意思と能力で「再チャレンジ・夢工房隊」を結成し、プロ職人以上の極めて立派な出来栄えで自ら居住するコミュニティハウスを完成させたことではないかと考える。人間には必ず「得手・不得手」、「その人の特性」がある。学校で勉強を強制されるのは厭だが、力の強い人、高い所に登れる人、手先の器用な人、根気のある人、歌のうまい人、工作絵画の上手な人・・等など、それぞれ人間の顔が異なるが如く、その人格形成に於いて優れた分野、特定技能を有している筈である。その個性・特性を如何に生かし、如何に伸ばすかが主たる社会的責務の筈である。果たして現代社会で言う「人間に対する価値判断基準、社会評価基準」が正しいのか、大いに見直すべきである。

ホンモロコ、マゴイの育養
および販売の事業化

当 NPO 法人は、元ホームレスの自立生活・社会復帰と疲弊する村落の地域活性化を目的に、過疎地の耕作放棄地を活用し、女性・高齢者・障害者でも十分対応できる琵琶湖固有種ホンモロコ養殖田（計 9 面）事業を、マキノ町海津漁業協同組合・滋賀県漁業協同組合連合会・地元農民などと協働運営中で、築池・養殖技術も既に確立、順調に成魚を育養している。

ホンモロコ成魚は100グラム当り300円の高値で販売可能、毎年、春期にはホンモロコ100 万粒、マゴイ10万粒の採卵・孵化が可能となり、高収益事業としての自立の望みが現実化してきた。

※ホンモロコは琵琶湖の固有種でコイ科の小さな魚。コイ科で最も美味といわれている。



小学生によるホンモロコの放流

地元のマキノ東小学生による「ホンモロコ琵琶湖放流会」が恒例となった。これまでの土曜日・日曜日開催が、当年はウィークディとなり、小学校授業に差し支えるので、実は「保育園児の参加」を考えていた。ところが、小学校校長から「今年はいつやるのか！」との催促の電話。事情を話したところ「正規授業の一環としてホンモロコ放流体験学習授業を行う！」と即答・一喝され、当方は「有難う御座います！」の一言。いよいよ、「事業の途中下車」が出来なくなったことを痛感！

活動の特徴など

本プロジェクトの目的意識

当 NPO 法人の本プロジェクトによる目的意識は、

①過疎化・高齢化・少子化が日々進行し、崩壊の一途にある農山漁村を活性化する活動本拠地として「地域コミュニティハウス」を地域住民と共に運営する。

②地域住民の生活支援としてコミュニティハウスから高齢者・障害者家庭へ「再チャレンジ夢工房隊」を派遣するための地域コミュニティサービス連絡ネットを構築する。

③地域の農業・林業・漁業の作業に参加することにより、住民参加型地域社会福祉を実現し、地元の振興、収益向上事業に寄与する。

④それら担い手の中心的人材として、元ホームレス・ニート・ネットカフェ難民と呼ばれた人々が活躍することにより、地域に期待され、働く喜び、生きる幸せを体感し、自立生活と共に社会復帰を実現する。

⑤絶滅危惧種のホンモロコの養殖・放流活動により琵琶湖固有種の生態系を回復する。

⑥全国の地方に暮らす住民の生活安定と、後継者づくりを実現させる

という 6 つの難問題を同時並行的、且つ即効的に解決する全国波及型モデルとして実現することにある。

コミュニティハウスを活用し始めて

予算を大きく越える多額の資金を投下して完成した後も、「当ＮＰＯ法人財政事情を全く無視した」コミュニティハウス住民自らのアイデアが大量に湧出し、部分改装・家具装飾類取付けなど今も継続、「悲しくて嬉しい悲鳴？」を上げている。自ら居住するコミュニティハウスをより一層住み易く、美しいものに仕上げようとする彼らの意欲と能力に、今更ながら驚かされる日々の連続である。

コミュニティハウスの落成式当日

落成式当日は、ＮＨＫテレビ・毎日新聞・京都新聞などマスメディアの取材のもと、多くの関係者・地元住民が集い、全国初・100%民間力の「地域コミュニティハウス」の完成を祝い、円滑な運営を祈った。正直なところ、地元住民の反応を大いに気にしていたが、おしなべて好意的、且つ疲弊する地方での新しい事業の始動を期待する熱い眼差しを一同に送ってくれたのが、幸いであった。

成果および波及効果

これまでの活動を通じ、地域住民・地域行政区・漁業組合・各種団体が元ホームレスらの就労活動に暖かい応援を送り、休耕田・耕作放棄地・人工植林山地を提供して彼らの活動に積極的に関与すると共に、空き家を開放してくれるなど、地方活性化の原動力として彼らを地域に迎えるこころ熱い支援基盤が構築しつつある。

長年に亘り求職活動を行うにも拘らず、「学歴が低い、・・」等々を理由に、全く就労できない大量の生活保護費受給者に関し、大津市より「就労意欲喚起支援等事業」（2010 年 3 月まで延べ 500 人、4 月以降は延べ千人単位）を受託、大津市から数名の被保護者がコミュニティハウス創設事業に参加することとなった。

想定外のこと

コミュニティハウス用に購入した民家 3 棟のうち、1 棟の前所有者の当主が急死した。続いて、ご夫人が大病を患い、大手術を受けて長期入院を繰り返すなど、全く予期せぬ出来事が連続的に発生して、1 棟の完全引渡が大幅に遅れた。

また、当初は簡易改修を予定していたが、結局、躯体部分を残し殆ど全てを直す大規模改修工事となり、予算が大幅超過となったが、結果的には大変立派なコミュニティハウスが完成した。

ホンモロコの養殖作業について

当初は、マキノ町海津漁業組合が 23 年間放置したコンクリート製の養殖池で親魚を飼育・採卵・孵化・育養。いよいよ当年からは念願の「耕作放棄地有効利用による無給餌育養システム構築」テストを開始した。「コンクリート製養殖池を対照区」に従来どおりの給餌、「耕作放棄地を試験区①」に同量を給餌、「新たな耕作放棄地を対照区②」に三分の一量の給餌を行い、対照区・試験 2 区ともほぼ同サイズ育養の結果とノウハウを得た。来年度は、前人未踏、全国初の「抽水植物と琵琶湖固有種との共生養殖田システム構築」による「完全無給餌・自然産卵孵化・抽水植物と琵琶湖固有種の毎年収穫売上達成」に向け、日々準備に追われている。

今後の予定

幸いにも、当 NPO 法人活動に対する地域住民の理解と期待が徐々に高まりつつある。

今回、落成を見た地域コミュニティハウス地元説明会に於いても、「見知らぬ元ホームレスらがやって来る」との偽りなき不安感に入り混じり、多くの住民から「これまで当所に来ている元ホームレスらの仕事ぶりと真面目さ、器用さは良く知っている。差別はしない。地方活性化の核的人間に成り得るか否かを、ゆっくり見守る」との声が圧倒的多数であった。コミュニティハウスに居住する新たな人間と古くからの地域住民との触れ合い、地方を活性化するコラボレーション作業、地域団体を含んだ協働組織構築を早期に実現することに重点を置いている。

今後、彼らが地方の収益事業の重要な担い手として地域住民から期待され、彼らの培った技能を地域住民に提供できる仕組み・ネットワーク事業を確立して、地方の街づくりを具現化することが当 NPO 法人の最大の特色である。

他のNPOに伝えたいこと

1. 故事に「魚を与えて一日を養い、漁を教えて一生を養う」との名言がある。ホームレス・ニート・ネットカフェ難民・派遣切り・同予備軍と呼ばれる人々に生活保護費など多額の税金を恒常的に費やすは、今日一日を考える施策でしかない。

また、手弁当によるボランティア活動は精々 3 年間が限度。誰もが重い荷物を背負って長い距離は歩けず、高い山も登れない。地方の再生と生態系に順応した新たな事業の構築、それも稲作に比して数倍の高収益性を期待できる自然環境と生産物が各地方に必ず存在する筈である。

これら安定的・継続的・自立可能な収益事業の構築無くしては、次世代の後継者も育たない。当然、地方の疲弊、社会的格差拡大と生活保護者の加速度的増大に歯止めが掛かることもなく、また、我々の税負担増大も止まるところを知らないのである。

即ち、本課題は、我々が解決しなくてはならない我々の問題であることを、早期に認識すべきなのである。

2. 各地方には、その地方固有の自然環境に馴染んだ収益性の高い独自の生産物・特産品が必ずある。

本事例は、ボランテイア活動にビジネス手法を導入し、自立可能、継続的、且つ発展的な高収益事業を根付かせ、「地方のコミュニティビジネス」による街づくりの全国モデルを構築しようとする挑戦でもある。

本視点を配慮され、他団体活動に援用して頂ければ幸いである。